
My Sweet Beast

天音由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Sweet Beast

【Nコード】

N7174Z

【作者名】

天音由羽

【あらすじ】

新解釈 「美女と野獣」です。

実父と継母、そして二人の義姉妹と暮らしていたリリー。

ある日街へ仕事に行った父の帰りが遅いことを心配し、街を出ようとする。

その時、一通の手紙が。

「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

リリーは父を助けるため、単身野獣の城に乗り込むのだが…。

紳士で上品な心優しい野獣と、明るく気立てのいいリリーの恋物語。
ほのぼのハッピーエンド予定です。

Vol. 1 出逢い

MY Sweet Beast

鬱蒼と生い茂る森の中。

一筋の光も差し込まず、足元は常にじめじめとした湿気でぬかるんでいる。

頭上には青黒い葉が覆いかぶさってきて、木々の蔭が蜘蛛の巣のように絡み合っている。

フクロウの低い鳴き声が絶えず響き渡り、時折野生の狼と思われる唸り声が微かに聞こえる。

葉擦れの音はなにやら幽霊の囁き声のように聞こえて、ゾクリと身震いしてしまう。

どうして私が。

なんてことは分かっている。

何より大切な父は、私の母を亡くしてからしばらくして、どこで見つけてきたのかド派手な極楽鳥みたいな継母と再婚した。

継母にはこれまた似たような装飾に身を包んだ、九官鳥（つまりおしゃべりで頭が軽いつてこと。っていうと九官鳥に失礼ね）みたいな二人の娘がいて。

私には一度に面倒臭い家族が増えた。

その三人は大きな街まで仕事の交渉に出向いた父にたんまりお土産をねだり、家では私を召使替わりに顎でこき使い、好き勝手に過ごしていた。

あれだけねだられば値段も相当なはずだ。

父は私にも土産に何が欲しいか聞いてくれたけど、お土産なんていらなかった。

「お父さんが無事に帰ってきてくれればいいわ」

そう言つてこれ以上継母たちが父に何かをねだる前に、さっさと出かけるよう促した。

その父が帰宅予定より一週間を過ぎても戻らない。

何の連絡もないまま帰つてこないなんておかしい。

どうしてこんなに帰りが遅いのか、手がかりを求めて街から帰り付いた人たちに手当たりしだい聞いて回つたけれど、結局何も分かっていなかった。

こうなつたらしょうがない。

生まれた頃から一緒に暮らしている愛馬にまたがって、自ら父を探しに行こうと街を出ようとしたのだけれど。

出かけようとしていた私を見つけて、慌てた郵便屋さんが呼び止めてくれた。

そして一通の差出人のない手紙を受け取る。

開いてみれば、そこに書かれていたのは

「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

いかにも悪党な文章でそんなことが書かれていた。

継母たちの反応は推して知るべし。

「お母様！！とつても怖いわぁ！」

「どうしちゃったのかしらお父様！！何をやらかしたの!？」

「まったく困つたものねえ。大丈夫よ、私の可愛い娘たち。リリー、あなたが行つてらっしゃいな」

「…」

「こつも分かりやすいといつそ清々しい。

無論あなたたちに言われなくても行くつもりでした。

と、喉まででかかった言葉を無理やり飲み込んで、私は結局また愛馬にまたがって街を出ることにした。

最初に手紙を読んだ時には書かれていなかったはずの地図が、森に入った頃突然浮かび上がったのにはビックリだ。

どこへいくにせよ、この森を抜けなければいけないから、とりあえず進もうとした矢先のことだったのだけれど、どうも解せない。

地図によれば森には幾筋か道があるらしいのだ。

素直に従っていくと、確かにあった。

一度も通ったことのない…というか、今まで見たこともない道だったけど。

こんなところに道なんてあったのね。

なんて呑気に思えたのは最初だけだった。

地図通りに一歩踏み出すと、急に愛馬が怯え出してそれ以上先へ進めなくなってしまったのだ。

仕方なし馬を降りて、自宅へ戻るように押し返してやり、私は一人歩き出したというわけ。

動物の本能って素晴らしい。

あの子にはこの森がどんな場所なのか、察することができたんだから。

こんな不気味なところだって分かってたら、私だってもっと準備万端にして旅立ったのに。

後悔してももう遅い。

頼りにできるのは手元にある地図一枚だけ。

それならば、あとはここを一刻も早く抜け出さなければ。

ぬかるむ地面をしつかり踏みしめ、足早に歩く。

いろんな声や音が聞こえるけれどそれら全てを聞こえないふりし

て通り抜けていく。

服が無数の細い枝に引つかかり、どうしても数力所破けてしまっただけけれど、そんなこと気にしてられない。

最後は走る勢いで森を駆け抜けた。

暗くて深い森は、急にぱっと開けた。

顔を上げるとそこには聳えるように建てられた大きな門。

延々続いている白い外壁には様々な模様が複雑に彫刻されている。

おどろおどろしい悪魔が掘られているのは、ここの主の趣味なのだろうか。

なんて趣味の悪い。

思わず顔を顰めてから、おそらくこの向こうに父がいるのだと、覚悟して鉄の扉を押し開けた。

これまた不気味さを煽る鉄同士の擦れるギィという音が辺にこだまする。

「失礼します…」

一応声をかけてみる。

微かに聞こえる小さな足音。

…何人かいるらしい。

でも人の足音とは何かが違う。

そう思っていたら、小さな幾つかの影が目の前に躍り出た。
え。

「お待ち申し上げておりました。さあ、どうぞ」

丁寧に奥を指し示されて、恭しくお辞儀される。

に、人形？

目の前で喋ったのは男の子のビスクドールだ。
傍らには女の子のビスクドール。

なぜ？

私、もしかして夢を見てる？

森の中が怖すぎて気絶したのかしら？

ぎゅっと頬をつねってみれば

「痛い」

ってことはこれは現実なんだわ。

現実なのに、なぜ人形が？

そう問いかけたって、答えはどこにもない。

キツネかタヌキにバカされてるのかしら。

でも。

もしそうなら、化かし合いに勝てばいいだけのこと。

思い直して、私は促された奥の方へ足を踏み出すのだった。

二体のビスクドールは器用に歩いて城内を案内してくれる。
森と同じくらい、いえ、それ以上に暗い廊下は足音がやたらと響く。

両側の壁沿いにブリキでできた鎧が飾られていて、手にされた槍が鋭い鋒を鈍く光らせている。

天井には天使…ではなく蝙蝠羽の悪魔が悪どい顔で飛び回る天井画。

壁に飾られた彫刻も幼い頃読んだ本の挿絵に出てきたゴブリンだ。
なんて悪趣味。

本日二度目の感想に、思わずまた顔を顰めてしまった。

そうして城をぐるりと見回しながら歩いているうちに、どうやら地下の牢屋らしき場所にたどり着いたようだ。

ロウソクがある場所を照らしてくれる。
ぐらりと影がゆれた。

「お父さん？」

「まさか…リリーか!？」

「ちよ、お父さん! どうしてこんなところに…」
しばらくぶりの再会に手と手を取り合って、鉄格子越しに顔を合
わせて喜んだのも束の間。

ぬらりと背後に気配を感じた。

大きな影に覆われて、辺りが一瞬で暗くなる。

異様な気配だった。

振り向くのも躊躇われて、体が硬直する。

「…父親を取り戻しに来たか」

低く地を這うような声。

吐息は獣。

漠然とした恐怖に包まれる。

ぐっと瞳を閉じて、声の主の方へ向き直った。

人形が喋ってここまで案内してくれた。

見たこともない道を通ってきたし、第一あの手紙の文章。

門の彫刻に廊下の天井画、壁の彫刻。

もう何が起こってもおかしくない。

覚悟して、瞼を押し上げる。

「……………」

嘘…でしょう…。

目を限界まで見開いていたと思う。

呼吸の仕方まで忘れていた。

驚愕。

全身を覆っているであろうライオンの様なたてがみに、口からち
らりと見える鋭い牙。

どんなものも切り裂いてしまいそうな爪に、大きな獣の手。

荒野を素早く駆け抜けていそうな逞しい脚。

暗闇でも輝きを放つ力強い碧眼。

視線だけで人を殺せそうだ。

事実、今の私は彼に捕食される寸前だ。

目の前の相手を見た瞬間に、自分の命はすぐに潰えるだろうと思えた。

あの噂は本当だったのだ。

幼い頃から街でまことしやかに語られていた「野獣」の昔話。

人を攫っては喰らい、悪魔のように血に飢えている、と。

どうして父はこんな恐ろしい野獣の住処に入り込んでしまったのか。

考えたところでもう遅い。

私も喰われるのだろう。

そう、全てを悟って諦めようとした時だった。

ぐつと野獣が近づき、いつの間にか床に座り込んでいた私の腕をとって、立ち上がらせる。

え？

それから父を閉じ込めていた牢の扉をすんなり開き

「これで契約は成立だ。お前を解放しよう」

静かな声で告げた。

囚われの身のはずだった父は、乱暴に扱われることもなく、どこからともなく現れた荷車にドサと載せられる。

「リリー!!!」

悲壮な声がして、ハッと我に帰れば父が目の前から遠ざかるところで。

「お父さん!!!」

叫ぶ私の体を大きな獣の手がつかんで引き止めていた。

すぐに父の姿は暗闇に消えて見えなくなる。

助かったの？

これで本当に父は助かったの？

たまらず野獣に縋り付いて、獣の顔を見上げた。

全身の力が抜けて、足で体を支えられない。
でも私の体は床に打ち付けられずに済んでいた。
野獣だ。

遅しい獣の腕が、私の腰を支えてくれている。

…なぜ？

全ての問いは言葉にならずに消えていく。

けれど。

「そなたの父は無事に送り届けられる。安心するがいい」

「え？」

見抜かれた？

それとも、声に出していた？

「部屋はこちらだ。歩けるか？」

「へ、や？」

「ここで寝たくないだろう？」

「…私、父の代わりに…」

牢に閉じ込められるんじゃないの？

あなたに食べられるのを、ここで待つんじゃないの？

どうして部屋なんて？

心の中の問いかけを、彼はどう読み取ったのだろう。

一瞬だけ怪訝な顔をしたかと思ったら

「言っておくが、私はそなたを喰らったりしない」

なんて言った。

続く

どこまで歩いてても、憂鬱さを増す廊下は重く薄暗い。

やたらと響くのは私の足音と、野獣の足が爪で床をひっかく音だけ。

布で覆われているビスクドールの足は、ぼふぼふと小さな音を立てるのみ。

無言の重圧に押しつぶされてしまっかと思っただけれど、意外なことに、野獣は静かに話しかけてくれていた。

「部屋には一通り必要なものをそろえてある。足りないものがあればいつでもヴィスコンティに言うといい」

「ヴィ、ヴィスコンティ？」

「男の人形の方だ。身支度は女の人形の、シシリエンヌが整えてくれるだろう」

野獣は丸くて大きな指で（ほぼ手で）人形を指し、ビスクドールの紹介をしてくれた。

視線を二体、いや、二人？に向けると、揃ってこちらにお辞儀してくれる。

私もお辞儀を返したかったけれど、それは叶わない。

なぜってそれは、野獣が相変わらず私の腰を支えて…というか、抱えているからだ。

どうやらまだ力が抜けていると思われるらしい。

けれど意外なほど心地よい支えだった。

ふさふさの毛並みもさることながら、なんというか、一つ一つの行為がスマートなのだ。

野獣つてもつと荒々しいものだと思っただけ、彼は違うみたい。

第一彼は私を食べないと言った。

しかも。

「ここがそなたの部屋だ」

通されたのは我が家がまるごと入りそうな大きな部屋で、窓際には天蓋付きのふわふわなベッド。

サイズは多分クイーン？

一人で寝るならどれだけ暴れても大丈夫そうだ。

背丈より大きな窓にはひらひらの桃色カーテン。

クローゼットはウォークインで、多分実家の部屋より広い。

用意された服は全て高級な生地で作られた、仕立てのいいドレスばかり。

えっと。

これを普段着に使え、と？

思わず野獣を見ると満足げに頷かれた。

シシリエンヌも目を輝かせている。

人形だけどちゃんと表情も変わるし、まるで生きているみたい。

「あの…私、本当にこの部屋を使っているんですか？」

「なぜだ？」

深い碧眼が穏やかに問いかける。

「私は父の代わりでしょう？ 囚われの身なのに、こんなに至れり尽くせりなんて」

信じられない。

言外に告げて部屋を見回した。

けれど野獣は

「そなたにとつてはこの城が檻のようなものだろう。それで十分だ。私はそなたを捕らえたが、傷付けるためでも辱めるためでも、ましてや喰らうためでもない。できる限り快適に過ごせるよう配慮するつもりだ。ここでの生活は保障するし、安心していい」

と、ことのほか穏やかな口調でそう言った。

騙されているのとは違う。

城に閉じ込められるなら、牢は必要ないってこと？

それにしてもこんな立派な部屋を充てがうなんて、一体どうして？

疑問符ばかりが浮かぶ。

それに明るい場所に出てようやく分かったことがある。

ライオンのようなたてがみは夕陽のような黄金色をしていて、きれいに手入れされていた。

身につけているのは、大きな体格に合わせて作られた特大の貴族衣装。

絹糸で織られた光沢のある紺色のジャケットに白いズボン。

ふさふさのしっぽもたてがみと同じ色をして優雅に揺れている。

服から出ている手足は確かに獣のものだけど、爪もすっかり磨かれ、研がれているし、汚れは一切付着していない。

清潔さの代名詞「石鹸の香り」がただよう野獣なんて、誰が想像しただろう。

その野獣がひょいと私の顔を覗き込んできた。

「食事は揃って食堂で食べることになっている。もうすぐ用意ができるはずだ。破けた服を着替えてくるといい。ただし疲れた顔をしている、コルセットのきついドレスよりゆったりとしたものを着た方が良さそうだ」

「…はい」

予想外の心配りまで見せられて、私は素直に頷いた。

小さいといってもシシリエンヌの身長は1メートルくらいある。

人形にしては大きな方かもしれない。

おかげで彼女は軽快な動きでクローゼットから、適当なドレスを見繕って持ってきてくれた。

ついでに椅子に乗りながら着替えを手伝ってくれようとしたのだが、いつも自分で全てやっている私はそれを丁重にお断りした。

シシリエンヌは働き者だ。

一つやることがなくなってもすぐに次の仕事を見つける。

私が脱いだ破れた服を、あつという間にどこかへ運び、支度の整った私を食堂へ案内するためにすぐ戻ってきてくれた。

「リリー様、こちらへどうぞ」

想像していたよりも落ち着いた声で促される。

やっぱり疑問だ。

人形に声帯なんてあるのかな。

どこから声が出るんだろう。

ビスクドールのはずなのに表情が変わったりするし。

なんて脱線した疑問が頭をぐるぐるするけれど、シシリエンヌが丁寧に手で促してくれたから、従って部屋を出ることにした。

あれ？

廊下に出た途端僅かな違和感を覚える。

その正体はすぐに判明した。

明かりだ。

野獣：さん、に、案内された時は今の半分ほどの明かりだった。

今は鉛色の鎧が勢ぞろいして壁に飾られていても、最初ほどの不気味さはない。

天井の悪魔はやっぱり好きになれないけれど。

よく見れば足元に敷かれた赤い絨毯は、毛玉一つないくらいきれいに掃除されている。

壁も蜘蛛の巣なんてないし、塵一つない。

歩幅の小さなシシリエンヌが滑るように廊下を歩いても埃が立たないのは、毎日細かい所までしっかりと掃除されているからだろう。

内装は悪趣味だけど、キレイ好きってことかしら。

でも、誰が掃除してるの？

シシリエンヌたち？それとも、まさか…。

「どうした？」

「ひっ！？」

野獣さん!？

突然大きなライオンの顔が現れたりするから、反射的に後ずさって悲鳴を上げそうになった。

直後に見えたのは若干耳がしゅんと垂れた野獣さん。

あ。

「あの、ごめんなさい。びっくりしちゃって」

「…いい。誰でもこの顔を見れば驚くだろう」

案の定な誤解をしてる野獣さん。

もちろん顔を見てびっくりしちゃったのは本当なんだけど、獣の顔に驚いたんじゃないの。

「顔に驚いたのではなく、突然現れたから驚いてしまったんです」

きつちり訂正して彼の顔を覗き込む。

くるりとした碧眼は複雑そうな色を見せた。

納得しかねる、って顔ね。

けれど野獣さんは深く追求せず、食堂の椅子を引いて私を座らせてくれた。

少なからず傷ついているのに、責めることも叱ることもなくエスコートするなんて。

とつてもジエントルマン。

普通に考えたら自分を捕らえた人喰い野獣と食事だなんて、泣いて悲鳴を上げながら怯えて震え上がってもおかしくない状況。

でも不思議。

ちつとも怖くないの。

おかげでどのくらいの広さなのか比較対象も見つからないような食堂を見回す余裕まである。

天井から吊るされているのは四方八方に光を反射させる豪華な三段シャンデリア。

壁に描かれているのはやっぱり悪魔なんだけど、彼らが戯れるのは色鮮やかな春の景色で。

窓枠や柱は金で塗られている。

サテンで作られたカーテンはしっとりした光沢を放ち、ロイヤル

ブルーが心を落ち着かせてくれる。

あれって本当にサテン？

もしかしたらもつと高級な生地かもしれない。

食堂の中央に置かれたテーブルはよく磨き上げられて、どこもかしこも輝いている。

アンティーク調の重みある茶色の椅子もテーブルと同じ素材だ。

背もたれを大きく作り、よりかかる場所にはふわふわのクッションまで置かれている。

いつの間にか用意されていたカトラリーは、全て本物の銀食器。

持ち手にはすべて細かな彫刻が施されている。

縁取りに使われているのはこれまた本物の金だ。

これ、やっぱり夢？

現実だなんてとてもじゃないけど信じられない。

けれど

「どうした？」

野獣さんの声はちゃんと耳に届いているし、その感覚もリアルだ。なぜかおでこに手を当てられてるけど、肉球の柔らかさが心地いい。

両肩に手を置かれて少しだけグラグラ揺らされてるけど、なんだかそれも心地いい。

って、やっぱりこれって夢？

「現実だ」

あー、そうか。

現実ね。

って！！

「!？」

慌てて遠ざかっていた意識を覚醒させる。

おでこにはまだ野獣さんのぶくぶく肉球が当たっていて、穏やかな碧い瞳が私の視線を捉えている。

なんだかバツの悪そうな顔をしてる。

まるでイタズラしたのがバレて怒られた小さな男の子みたいな顔。
どうしてあなたがそんな顔してるの？

あんな手紙をよこした悪党なんじゃないの？

…変な人。

「その、すまない」

「？」

「現実逃避したくなるほど辛い思いをさせているのはよく解っているし、申し訳ないと思っている。だが、こうする他なかったのだ。この姿に驚き、恐怖心を抱くのも…当然だ。だが、せめて食事はしつかり摂って欲しい。そうでなければそなたが体を壊してしまう」
苦しそうに歪められた表情は、切実さを前面に出して、懇願しているみたい。

だから、どうしてあなたが私を心配しているの？

父の代わりに私を捉えたのは、他でもないあなたなのに。

でも。

「どうしてもともに食事するのが無理だというなら私が席を外そう。
どうか食事を楽しんでくれ」

辛そうに提案する彼の言葉に頷くことは出来なかった。

続く

Vol.3 初めての晚餐

困った。

何本もあるカトラリーは、一体どれを使えばいいのかわからない。家ではナイフもフォークもスプーンも、いつも一本だけだったもの。

首をかしげながらそつと野獸さんを見る。

マネをすればいいかと思って視線を向けたのだけれど、彼は既に一本ずつを手にとって食べ始めようとしていた。

あら。

タイミングが遅かったらしい。

けれど結果オーライ。

野獸さんが私の視線に気づいてくれた。

「こういう夕食は初めてか？」

「はい。お恥ずかしながら」

「そうか。気にすることはない。外側から使うのだ」

なるほど、外側からね。

高価なナイフとフォークを手にする。

器用に一欠片を口に運ぶと、その美味しさに頬が緩んだ。

「上手だ」

ちよつとぶつきらぼうなほめ方だけれど、何だか嬉しくなる。

「ありがとうございます」

笑顔と一緒にそう言えば、野獸さんは手にしていたフォークを落として慌てた。

どうしたのかしら。

あらあらと思ったけど、すぐに気を取り直した野獸さんは、さつきより少し速いスピードで料理を平らげていた。

一方の私は彼に比べて一口が小さいせいか、倍近い時間をかけて食べ終える。

するとすぐに次の料理が運ばれてきた。

初めて目にする大きさのステーキ。

肉厚でワイン色の肉汁がじわりと浮かんでいる。

立ち上る湯気は香ばしい。

臭みを消すための香草もハーブの優しい香りがする。

一口大のステーキを口に入れるとあつという間に旨みが広がって、噛めば噛むほど美味しさが広がる。

「美味しい」

無意識に言葉にすると、向かい側の野獣さんはほわりと表情を崩した。

「気に入ったか？」

「はい」

素直な返答に彼は満足げに目を細める。

そして彼も一口、洗練された仕草でステーキを口へ運ぶ。

なぜかそれを目で追って、反応を待ってしまふ。

思ったとおり彼も味に満足したのだろう、頬を緩めていた。

良かった。

そうひとりごちて、ハツとする。

良かった…？

どうしてだろう、胸の中が温かい。

変なのは私の方だ。

いくら想像と違っていているからって、相手は野獣さん。

私を食べないとは言ったけど、捕まえたのは間違いなく目の前の人。

人？

既にそんな感覚で彼を見ていたことに気づかされる。

私、彼を人として見ている？

目の前にいる、誰がどう見ても獣の、彼を…？

「どうした？具合でも悪くなったか？」

問いかける口調は穏やかだし、内容は私を気遣うものだし。

確か街の噂で聞いた野獣は、いつでも鋭い牙を剥き出しにして研ぎ澄まされた爪を振り回し、凶暴な手足で捕らえた獲物を引き裂き、血が飛び散るのも構わず、というよりむしろ血肉を喜んで貪り食うって…鬼か悪魔かはたまた魔王か、ってくらい恐ろしい存在だった。とても「人」だなんて形容できない。

そもそもあんな大きな手で器用にカトラリーを扱ったり、新鮮だとわかる野菜がふんだんに使われた前菜を美味しく平らげたり、ぷっくりした肉球で優しくおでこに触れたり、何度も脳内にトリップする私を気遣ったり、本当に野獣ならそんなことするかしら。

私はしげしげと野獣さんを見つめる。

丸くて温かな碧眼は戸惑うようにこちらを見つめ返す。

そうよ。

本当に野獣ならこんな血の通った優しい目をする？

人の体調や精神状態を気遣ったりする？

自分が優位に立っていることは十分に分かっているだろうに、あまつさえ捕らえた人間の食事を優先して自分は席を外すなんて言い出したりする？

答えは全て、ノーだわ。

彼が本当に野獣なら数々の振る舞いをするわけがないもの。

…かといって、着ぐるみにも見えないのよね。

体を支えてもらっていたからよく分かる。

彼の体温は本物だ。

「あの」

「何だ？」

野獣さんは突然口を開いた私に困惑しながら返事をする。ほらね、こんな反応は高い知能を持った人がすることよ。本能のままに人を喰らう野獣のそれではないわ。

「あなた、本当に…本当に野獣さんですか？」

目の前の可憐な唇はそう告げた。
は？

私の顔はさぞ情けないものだったろう。

あまりに脈略のない問いかけに一瞬言葉を失う。

なぜかこの娘は時折考えに耽る事があり、無言でくるくる表情を変えるところがある。

最初は私の姿と自分が置かれた状況に悲嘆し、恐れ、怯えているせいかと思ったが、私が席をはずそうと提案したのをきっぱり断つてから、どうやら怖がって現実逃避しているのではないとわかった。食事が運ばれれば嬉しそうに頬を綻ばせて料理を口に行っているし、緊張している様子も見られない。

少しの間和やかな時間が過ぎていたのだが、彼女は再び突然思案顔をした。

そして、なぜかじっとこっちを見ていると思ったら、先の問いかけを口にしたのだ。

何がどうなつてあんな質問が飛び出したのか分からない。

分からないが…ここまで冷静に接してくる人間は初めてだった。

あの父親も肝が据わっていたが、さすがその娘だ。

地下牢では父親を心配する思いもあつてか、突然の出来事に慌てたり怯えたりする様子を見せたが、これまでの短い時間で私を観察していたのかもしれない。

本当に野獣か、などと聞かれたのは初めてだ。

「…見ての通りだが」

内心湧き上がる嬉しさをひた隠したせいで、やたら威圧感のある答え方になってしまう。

けれど娘は少しも変わることもなくこちらを見つめている。

そして突然立ち上がると、私の背後に回った。

手には何も持っていない。

とはいえ何をされるか分からず警戒した。のだが。

ふわり

小さな手が首筋に触れる。

それからペタペタと、たてがみを撫でるかのように手を動かし

「やっぱり」

小さく呟いた。

「やっぱり、とは？」

問えば彼女は再び自席に戻り、複雑な笑みを浮かべる。

「もしかしたら着ぐるみかも、って思ったけどやっぱり違った。その姿は本物ね」

ああ、その「やっぱり」だったのか。

納得したが、直後、彼女は丸い栗色の瞳をまっすぐこちらに向けていた。

まだ疑問があるのだろうか。

視線で次の言葉を促すと、彼女は小さく微笑む。

それは私の心臓をどくんと動かすには十分すぎる魅力を放っていた。

なんとか動揺を押し隠すが、この体格では鼓動まで伝わってしまいそうだ。

しかし

「あなたの名前を教えてください」

慌てる私の様子などおかまいなしに彼女はそう言った。

名前？

「お互い呼び合う名前は必要でしょう？いつまでもあなたを野獣さんって呼ぶのは失礼なもの」

「ではそなたの名前も教えてくださいるか？」

「もちろん。あ、そうよね、名前を聞くならこちらから名乗るのが礼儀ね」

いや、こんな私に名前を教えてくださいるか、という意味で問い返

したのだが、彼女は別の解釈をして納得していた。
そしてさつと華奢な手を差し出す。

これは？

戸惑っている、彼女はその手で私の手を優しく握る。

握手の意味だったのかと、鈍った頭はのろのろと反応する。

彼女の行動を先読みしてリードしなければ、と思う心と反対に体は鈍りきっていた。

華々しい社交界で姫君たちを相手に、夜毎ダンスをしていたのはもう数百年も昔のことだ。

心は覚えていても、脳はそれらを少しずつ忘れてしまったのかも
しない。

なんとも言えない虚無感と苛立ちが心に巣食う。

けれどそれは一瞬で吹き飛んだ。

「私はリリー。あなたのお名前は？」

「…ラピス…ラピス・ランフォードだ」

「そう。ラピスさんっておっしゃるのね。どうぞよろしく」

「あ、ああ」

彼女の笑顔は、穏やかに輝く月のようだった。

続く

Vol. 4 闇夜の探検

住んでいた町の中央には噴水広場がある。

収穫祭に聖夜祭、季節ごとのお祭りが開かれる町一番の広場。

祭りの日には近隣の町や村からも人が集まり、広場は人の波に埋め尽くされる。

多分数百人以上の人が訪れるだろう。

そのくらい、広いと思うの。

でもね、ここは室内よ？

なのにどうしてこんなに広いのよーっ！！

と、心の中で叫んだ私は、どこぞの池か湖かと思うようなただっ広いお風呂を独り占めして、とつても贅沢な入浴タイムを過ごした。湯上りに用意されていたのはシルクの夜着と、何か動物の毛で作られたふかふかのガウン。

おかげで湯冷めすることなく部屋にたどり着けた。

部屋はシシリエンヌがすっかり整えてくれていて、ベッドの横にあるサイドテーブルの上には、心地よい眠りを誘うほんのり甘いホットミルクまで用意されていた。

室内の明かりはほとんどを消されているけれど、大きな窓から覗くまんまるの月が照らしてくれているおかげで、ちょうど良い明るさだ。

ぬくぬくしたベッドに潜り込んでも月が見える。

空には星が敷き詰められたかのように瞬いていて、静寂が広がるふう、とついたため息が何だかひどく響く気がした。

お父さんはどうしているかしら。

無事に家までたどり着けたかしら。

あの人たちの我俣に振り回されていなければいいけど。

…なんて心配しても、もう届かない。

せめて私は無事だと伝えたい。

野獣さん、ううん、ラピスさんは私を食べるつもりはないって。檻も必要ないし、このお城での生活も保証された。

今まで見たこともないような豪華な部屋とドレスに食事まで与えられて、薔薇が浮かんだお風呂まで入ったわ。

ベッドは天蓋付きのお姫様仕様だし、お世話をしてくれるメイドさんもいるのよ。

人形だけど。

初めて彼を見たときは絶望したけど、もうそんな気持ちもすっかり消えた。

ここまで大切に扱われたら、嫌な気分なんてしない。

疑問はたくさんあるけどね。

そう、考えれば考えるほど疑問はわく。

思い返せばあの手紙の文面とラピスさんが一致しないのもおかしいんだ。

あんなあからさまに悪党な文章で脅す人なのに、ことあることに私を気遣ってくれた。

ちょっととした仕草や言動から、彼は獣である自分の姿を気にしているようだし、何より動作の全てが上品だった。

本当に野獣か、と問えば「見ての通り」なんて答えたけど、今にして思えばちょっとはぐらかされた気もする。

この城の内装だって彼とはギャップがありすぎる。

おどろおどろしい悪魔より、天使のほうが似合うもの。

それにあのビスクドールたちの存在も、不思議極まりない。

普通じゃないわ。

「絶対何かある」

独り言をつぶやいて、完全に覚醒している体を起こした。

もう一度ガウンを羽織って、近くにあった燭台に火を灯す。

音を立てないように慎重にドアを開けると、そっと廊下に足を伸ばした。

やっぱり不気味だけど、女は度胸よ、いざ進め。

自分で自分を励ましながら、しんと静まり返った暗い廊下を歩き出す。

全神経を目の前に集中させながら辺りを見回すと、当然だけれど壁や天井の模様がぼんやり見えるだけ。

だから仕方なくどこまでどう続くか分からない廊下の先を進むことにした。

しばらく道なりに進むと、突然分かれ道に出た。

まっすぐ進むか、右の階段を上がるか。

ここまでいくつも角を曲がったから、微妙に方角が分からなくなっている。

窓もないから月の位置も確認できない。

城の外観も大きすぎて見えなかったから、この階段がどこへ繋がっているかなんて想像もできない。

さて、どうしようか。

と、迷っていた、その時だった。

ふっと背後に気配を感じてドキリと心臓が跳ね上がる。

直後、それがやけに近付いたのを感じた。

何!?

「ひゃ・・・」

あ! って、叫ぼうとした私の口は、大きなもふもふしたものに塞がれた。

声と空気を一瞬にして押さえ込まれる。

燭台を握ったままだったのは奇跡だ。

瞬間的にパニックになったけれど、見知った瞳を見た途端急激に冷静さが戻ってくる。

大人しくなった私に安堵したのか彼はそっと手を離してくれた。

「ラピスさん？」

「いかにも。こんな夜中にどうした？そなたの部屋はずいぶん遠くにあるぞ？」

「あ、あは」

正直に言ったら怒られちゃうかしら。

笑って誤魔化してみるけれど、ラピスさんは動じない。

「眠れずに探検ごっこか？」

あらら。バレていたのね。

「ごめんなさい」

観念して頭を下げる。

と、ふわり、肩に何かかけられた。

顔を上げると鼻の頭をちょいっと指で突かれる。

いたずらした子供をたしなめるみたいに。

「そんな薄着では風邪をひく。眠くなるまで案内してやるから、それを着ておきなさい」

そう言つと、ラピスさんはくるりと背中を向けて歩きだした。

え、え、え？

「あ、待って」

慌てて彼の後ろを歩いていく。

案内つて？

彼はいつの間にか私の手から燭台を受け取って、先を照らしながら階段を上がり始めた。

どこへ行くのかしら。

こうして行き先も分からない夜のお城探検が始まった。

階段が上がってすぐの廊下はギャラリーのようだった。等間隔に肖像画や風景画が飾られている。

少し進むと芸術品と呼ばれるたぐいの宝飾品がガラスケースに収められている。

一つ一つに簡単な説明を加えて、ラピスさんは明かりで照らしてくれる。

その中の一つ。

やたらと目を引く美男子の肖像画がある。

不意に私は足を止めてそれを見上げた。

「リリー？」

「あ……」

「気になるか？その絵が」

「はい。とっても気品溢れる素敵の方ですね……」

思わずほうつと息を着くと、なぜかラピスさんのしっぽが大きく揺れた。

ん？

どうしたんだろう。

そう思ったけど、ラピスさんはすぐ

「次の場所へ案内しよう」

と口早に告げて立ち去ってしまった。

私もそれにつられて足を動かすけれど、目の端にある文字が映った。

「ル？ラ？」

肖像画の下に金色の絵の具で何かが書かれていたのだ。

あれは多分名前。

作者の名前か、それとも肖像画の彼の名前か。

どちらにしてもこの暗がりでは、咄嗟に読み取るのは難しい。

なぜかもっと眺めていたくなる絵だったけれど、遠ざかってしまったラピスさんの背中を追いかけることにした。

ラピスさんはまだしっぽを大きく揺らしている。

そうして彼に導かれてたどり着いたのは、大きな真紅の薔薇が咲く小さな部屋だった。

「この薔薇は？」

「魔法の薔薇だ」

言われてみれば、薔薇は鉢植えにされることもなくガラスケースの中でふわふわ浮いている。

魔法？

「全ては魔法なのだ。この薔薇も、私たちの世話をしてくれる人形たちも、何もかも…この城にも魔法がかかっている」

少しだけ忌々しそうだ。

つまりこの城にかけられたらしい魔法は悪い魔法なのだろう。

彼にとっては。

そして全てが魔法なら、ビスクドールたちが喋ったり動いたりするのも納得できる。

もしかしたらこのお城が隅々までピカピカなのも魔法が関係しているのかもしれない。

だってたった二人の人形とラピスさんだけでは、このお城をここまでキレイにするのは無理なもの。

例え全てに魔法がかかっているにしても…ん？

そこまで考えてふと気付く。

何もかも魔法がかかっているなら、まさか、彼も…？

「ラピスさん、あなたにも魔法が？」

問えば、ピクリと彼の耳が動いた。

しかしすぐに彼は私の頭に大きな手をおいて、優しく髪を撫でる。

「リリー、これはきつと夢だ。考える事が好きな君の、夢の中の話だよ。さあ、もうベッドへ入っておやすみ」

私の小さな体は瞬時抱き上げられて、そのままどこかへ連れて行かれる。

「ラピスさん」

呼びかけても彼はもう答えてくれない。

その代わり。

笑顔をくれた。

泣いているのかと一瞬ドキリとするような、切ない笑顔を。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7174z/>

My Sweet Beast

2011年12月25日23時02分発行